

桜の花びらが散る前に

厄災

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

歴代最速就任幹部の黒石桜のポートマフィアに入るきっかけとなった出来事

この話から始まる彼女の物語お楽しみあれ！

目次

第1話	1
桜の散り始めた頃に	4

第1話

私の運命を変えたあの日

私は、夜の森を駆けていた。

夏の暑さのためあの日汗が流れ、目に入ったときもあり、目に激痛が走ったが気にもとめず、できるだけ速く敵を撒くために足を動かしていた。

私には休む時間さえなかった。

あのとき私は

(今、逃げ切るこゝが出来ても、自分は死ぬのだ)

そう思っていた。

私は物心ついたときから貧民街で暮らしていて親の顔さえ知らない孤児だった。

時折人が来るためそいつの荷物を奪い生活の糧にしていた。

私には双子の妹がいた。

私達は孤児だったけど「異能力」と呼ばれる不思議な力を持っていた。

私は「桜ノ花ビラノ下デノ死神ノ宴」という鎌を異能空間から出し入れ出来る異能力とその能力のおまげ的な感じの能力がある。

それは殺した相手の能力を奪い、夜のみ奪った能力が使えると言ったものだ。

妹の方は今回は省かせていただこう。

しかし、いくら不思議な力を持つていたとしてもまだまだ子供のように、寒さにも、飢えにも、

耐えられない。さらに、他の人に危害をくわえられることもある。

その為、私達は互いに身を寄せ合い、庇い合うようにして生きてきた。

しかし、それ也不需要ない。

妹が殺されたのだ。

犯人は三日間前に殺した。横浜の裏組“ポートマファイア”その組織に属する下級構成員だった。

なぜ殺されたのかは、彼らの密輸の場所、日時をうっかり聞いてしまったのだ。

露見されるのを恐れたのか奴らは私達二人でいるところを襲った。私はなんとか逃げたが、妹は殺されてしまった。それからしばらくして私は妹の仇討ち奴らを殺した。しかしそれが上の「ポートマフィア」に伝わり、こうして逃げるはめになってしまった。

足音はもう聞こえなくなった。逃げ切れたのか？

(いいえ。まさか、最後まで油断は禁物だわ。あの洞窟まで行けばきっと大丈夫。)

私はそう思い、森を抜け、川を渡り、洞窟の前まで来たとき、私は驚きを隠せなかった。

洞窟の前にいたのは一人の青年だった。

「よお、やつと来たな」

細身の体に黒のチョーカー、黒の帽子、衣服はほとんど黒で、貧民街で暮らしていた私にも分かるくらい、青年が身につけているものが高級品と一目で分かった。

そして、オレンジ色の髪、少し濁っているような青い瞳。

「…貴方は、一体。」

私は一歩後ずさった。

(まさか、待ち伏せされていたなんて…)

私はそう思った。

私は、異能空間から鎌を取りだし、構え、青年に冷たくこう言った。

「貴方は一体何者なのか答えなさい。」

すると、青年は、

「俺は、ポートマフィアの五大幹部の一角。中原中也だ。」

私はそう聞いたとき、肩を震わせた。

(嘘…でしょ？ポートマフィア？五大幹部？あの双黒の中原中也？)

双黒と言えば、一夜にして、敵組織を滅ぼしたと言われ、黒社会最悪のコンビだ。

「おい！手前、聞いてんのか？ーったく、もう一度だけ言ってやるから

ちゃんと聞けよ？

俺は、ポートマフィア五大幹部の一角の中原中也だ。首領の命令で手前を待っていた。」

(待って… いた?)

私は、(殺されるのだろう。) そう思った。

「私を殺すつもり？」

すると、中也は、少し笑い、こう言った。

「いや、手前を殺すつもりはねえよ。」

中也は、続ける。

「ポートマフィアの下級構成員がうじゃうじゃいるビルに一人で突っ込んで皆殺しにした。すると、ポートマフィアの追っ手が手前のところに必ず行く。そして、手前は、ここに来る。」

だから俺はここで手前を待つ。もし、手前が追っ手から逃げ切れたらポートマフィアに入れろって言われている。

中也がそう言うとは私は

(は？私がポートマフィアに？入る？何を言っているの?)

私が怪訝な顔をしていると、中也は、

「別に手前が入らなくても、手前の妹は、こっちで手厚く埋めてやるし、手前が生活に困らないほどの金子も与える。しかし、もし手前がポートマフィアに入るなら、求めるものを与える。」

だが、勿論血塗れた道だ。このままが良かったと思えるほどの過酷な道が待っている。それでも覚悟は、あるか？」

私は中也の言葉は、一つ一つ私の心に響いていた。

「ええ、その覚悟はあるわ。ただ、一つ条件がある。」

私を絶望しかないこの世界から救ってくれる？」

「… ああ、救ってやる。」

その言葉を聞き、私は、倒れ、眠ってしまった。

「チツ、しゃあねえなあ。」

中也はそう言い、私を抱き上げ、運んだ。

これが、後のポートマフィア歴代最速就任幹部と呼ばれる私。

”黒石 桜”が、ポートマフィアに入ったきつかけだ。

桜の散り始めた頃に

あの出会いから半年経った。

桜は今、ポートマフィアに入っている。

半年前、幹部の中也に拾われ、必死に頑張っていたらいつの間にか中也の右腕になっていた。

腰までとどくアルビノ特有の白い髪、血のように赤い瞳、白磁器のように白い肌の桜がポートマフィアの廊下を歩いていると、首領に呼ばれた。

首領の部屋に行くときだけはどうしても鬱になる。なぜならー

ガチャ

「エリスちゃん。お願いだからこの黒いフリルのワンピース着てよ」

…またか、首領のロリコンぶりにはいつもドン引きである。あれがポートマフィアの首領で本当にいいのかと思ってしまうが、つつこんではいけない。

声をかけてみる。

「あの、首領…黒石 桜です。」

「エリスちゃん。お願いだから」

首領はまだエリスという名前の幼女を追いかけてまわしている。

桜は息を吸い込むと

「首領！黒石桜です！」

驚いた顔で二人は桜を見る。

「え、えーと何かな？」

首領はエリスに聞いている。

「知らない！」

バタン！

大きな音をたてて、エリスは隣の部屋へ行った。

気まずい空気が流れる。

「えーと、君は何も見なかった。いいね。」

ごまかし始めた首領。

「…私はロリク…首領がエリス嬢を追いかけまわしていたところなんて見てなどいません。」

一、切、見、て、い、ま、せ、ん！

「…うん。まあそれでいいや。」

首領が声を小さくしながら続ける。

「君を呼んだのはねえ、中原君と一緒にポートマフィアの荷物を横流ししている連中がいるんだけどね、そいつらを×して…消して欲しいんだよね」

「あの、何で言い直したんですけどですか？て言うか何で私達が？」

桜がそう聞くと首領は、

「ああ、それは小説的にもちよつと悪い気がしたからね。あと、何で君達かというと、相手には、異能力者がいるせいでうちの下級構成員つて、異能力者、少ないでしょ？」

首領が聞いてくる。

「いや、私に聞かないでください。」

桜がそう言うのと、首領は、

「ああそう。まあ、下級構成員は異能力者少ないんだよね。だから下級構成員を投入しても無駄でしょ？」

首領の言葉に桜は

「まあそうですね。」

と言った。

「だから君達に頼みたいんだよね。」

首領がそう言うのと桜は、

「一応は分かったんですが、中也さんには話したんですか？」

桜がそう訪ねると、首領は

「ん？まあ一応は伝えただけど？」

(…「一応は」って)

桜はそう思った。

「とりあえず要件はそれだけだからもう帰っていいよ。」

首領にそう言われ、私は首領の部屋を出た。

しばらくすると中也からメールがきた。

「首領から仕事の件については聞いたと思うが、作戦結構時刻は、今夜12時にきっかりだからな。」

桜は「りょーかい」と返信するとポートマファイアの廊下を歩いていった。

1 A・M・12時1

「準備はいいか？」

中也が聞いてくる。

桜は小さな声で「ええ」と答えると桜と中也はアジトに同時に直行した。

二手に分かれ、横流し連中をを消していく。

敵の返り血が服につくが、構わずどんどん消していく。

奥までいくと、一人の金髪碧眼の、美しい顔立ちの少年がいた。年は15といったところだ。

少年は、桜に

「やあ、美しいお姉さん。道にでも…迷った訳でもないね、僕を×しに来たのかな？」

少し困った顔でこう聞いてきた。

桜はその質問を無視して質問をした。

「あなたがここの頭？」

すると少年は、

質問を無視するのは良くないと思うな。まあ、いいや。僕がここの頭目「アレン」だよ。ま、君もう死ぬけどね。」

桜は「桜のノ花ビラノ下デノ死神ノ宴」という異能力を使用し異能空間から鎌を取りだし構えた。

少年は、それを見ると

「君も異能力者か。じゃ、僕の異能力も見せなきゃね？」

そう言うと少年の背後にスライムに目がついただけの異能生命体が出現した。

スライム状の異能生命体は桜に攻撃してきた。そのぬるぬるした体からは想像もできない速さで大きな口を開けて。

桜はその攻撃を鎌で受け止めると足に力を込め、大きく跳び天井を

破壊した。

少年はあんぐりと口を開けて桜のを見ている。

今夜は三日月が出ていた。そして異能力を使った。

「夜叉姫―」

すると闇の中に白き花と見紛う程の美しい夜叉をが出現した。

桜には、相手の異能力を奪い月が出ている晩のみ発動できる能力がある。

相手の一瞬の間隙をついて夜叉が首をかつ切った。

ザシュー

辺りに紅い鮮血が舞った。

桜が入り口に戻ると中也が待っていた。

「遅えよ」

大夫待っていたらしく不満気だ。

「ごめんなさい。少し迷ったの。」

桜がそう言うと

「そうか…心配した。何もなくて良かった。」

そう言うとき中也は桜に右手を差し出し

「なんかおごれよ」

と言った。

桜は

「分かった。心配かけさせたお詫びね。」

中也の手を取り、闇夜に消えていった。